

文芸・宗教における九州——〈中央〉と〈地方〉の関わりから——

〔基幹研究「日本古典文学における〈中央〉と〈地方〉」の研究成果として〕

寺島恒世

*キーワード

基幹研究・中央と地方・シンポジウム企画・研究目的・活動報告

平成二十七年度の調査収集シンポジウムは、基幹研究「日本古典文学に

おける〈中央〉と〈地方〉」（期間：平成二十五年度～二十七年。研究代表者：寺島恒世）の成果報告として、二〇一五年五月二十一日（木）に実施された。

本基幹研究の概要は以下の通りである。

1 研究目的

本年度も前半は複数のパネリストによる発表、後半はそれに基づくディスカッションという通例の形式によった。ただし、今回は冒頭に本研究の企画や内容につき、司会から概要を紹介させて頂く時間を設けた。研究目的や研究分担、これまでの活動実績等を踏まえることで、発表をより分かりやすく聴いて頂き、以て後の討論に積極的に参加して頂くことを期していることである。

※

本計画は、日本の古典文学の成立や流布に果たした〈中央〉と〈地方〉の役割やその相関につき、総合的な検討を加え、新たな解明をなすことを目的とする共同研究である。古代の『万葉集』以降、我が国の文学は、都の所産であつても、さまざまな形で周辺地域から僻遠の地に至る諸国との関わりを有している。都が遷ることによって〈中央〉は変動し、政治体制の変化や経済活動等の進展に伴って〈地方〉の諸国も変容を重ねた。時代の進捗とともに、その〈中央〉と〈地方〉は、往還が活発化し、以て多彩な作品が生み出されてくる。

流動する社会におけるそれら多様な文学の生成や流布につき、本研究で

は、可能な限り広い時代を視野に収め、ジャンルも韻文・散文・芸能、さらには仏教文学までを対象として解明を施し、文学における〈中央〉と〈地方〉の問題を考えてみたい。これまでこの課題は、時代やジャンルに即して種々考察が加えられてきたが、未だ通史的、俯瞰的な解明はなされてはいない。これまで積み重ねられたそれら諸研究を総括しつつ、具体的に文献資料調査を中心として、異なる時代・地域・資料を対象に、方法・観点・立場等を異にする多様な事例研究を展開し、それらを総合する作業を通して、当該課題の新たな解明を目指したいと考える。

東京への一極集中と地方の疲弊が問題になり続け、とりわけ、先般の東日本大震災以降、〈地域の再生〉の課題がクローズアップされている折から、日本の文学さらには文化の成立と流布に関する総合的な究明を試みたい。

2 活動報告

右の目的のもと、本研究では、研究分担者の分担を次の通りとし、グループ及び個人ごとに研究を進め、年二回開催する研究会において研究発表を行い、それに基づいて議論するという形で進めてきた。

(ア) 研究分担

A 関東地区担当 小林一彦・石澤一志・野本瑠美・三村晃功
B 四国地区担当 小林健二・福田安典・岩城賢太郎・神楽岡幼子

C 九州地区担当 海野圭介・鈴木 元・徳岡 涼・中野貴文

D 寺院の学芸担当 齋藤真麻理・小助川元太・高橋秀城・高橋悠介・落合博志

(A～Dは冒頭がグループ代表者)

E 事例研究担当 浅田 徹・久保木秀夫・佐々木孝浩・妹尾好信・小山順子・寺島恒世

(イ) 研究会等の開催

a 研究会実施概要

第一回(二〇一三・六・七)

D 小助川元太「対馬歴史民俗資料館宗家文庫蔵『八幡大菩薩御縁起愚童記』について」

E 佐々木孝浩「室町後期地方武士の和歌活動―大内氏周辺の和歌短冊とその書風をめぐって―」

C 徳岡 涼 「細川幽斎と飛鳥井家」

B 福田 安典 「伊予宇和島藩の文化と書物」

第二回(二〇一三・一一・二五)

E 妹尾 好信 「仙台伊達藩における王朝文学享受―猪苗代正益著『源氏栄鑑抄』を中心に―」

D 齋藤真麻理 『諸国一見聖物語』考—京都妙頭寺と津島妙善寺—

A 小林 一彦 「中世の夫木和歌抄」

第三回 (二〇一四・五・三〇)

E 久保木秀夫 「万治四年禁裏焼失本と永青文庫蔵幽齋本歌合集」

C 海野 圭介 「岷江入楚の諸問題」

D 高橋 悠介 「称名寺の千字文説草について—「相本」関連の説草を中心に—」

第四回 (二〇一四・一一・二二)

A 野本 瑠美 『夫木和歌抄』と平安私家集」

E 小山 順子 「歌枕から名所へ—八景詩歌をめぐって—」

D 落合 博志 「室町期東国日蓮宗寺院における文献利用について—日澄撰『法華経啓運鈔』を例に—」

b 研究発表概要

これまでの各発表は、いずれも詳細な調査に基づく分析と、それを踏まえた〈中央〉と〈地方〉の課題に関する有益な提言がなされた。以下、それらを簡略に紹介する。

まず、本文(テキスト)に関する問題として、小助川元太氏(第一回D)

は、対馬歴史民俗資料館宗家文庫蔵本『八幡大菩薩御縁起愚童記』が、〈中央〉のテキストとの間に差異があることを主に、対馬という土地に即した変容の実態を報告された。小林一彦氏(第二回A)は、『夫木和歌抄』の成立・流布等多様な問題を扱われ、特に所収歌に東国らしい表現・現実生活に即した素材があること等から、本書が秘蔵され、流布しなかった可能性に説き及ばれた。野本瑠美氏(第四回A)も、同じく『夫木和歌抄』を対象に、藤原為家・為相関与説の検証のため詳細な調査を行い、利用された私家集に冷泉家本を含む多様なバリエーションが認められることを導いて、小林氏とは別の角度から成立論の問い直しを迫られた。

寺院の学芸関係では、高橋悠介氏(第三回D)が、「説草」という希少な文献を紹介・分析され、鎌倉に地におけるその享受の在り方から、京や南都の利用との比較が可能であることを導かれた。また落合博志氏(第四回D)は、日澄撰の『法華経啓運鈔』の詳細な分析から、東国において仏教関係のテキストがいかに流布したかにつき、実態を検証された。

そうしたテキストの問題を踏まえつつ、さらに発展して文化交流の解明に資する種々の提言がなされた。

佐々木孝浩氏(第一回E)は、議論が交わされてきた大島本『源氏物語』の筆者特定の課題につき、大内氏周辺の三百枚を超える短冊の筆跡、及び書流の分析という新手法を通し、〈中央〉と〈地方〉の文化交流の実態を解明された。徳岡涼氏(第一回C)も、資料の分析から、細川家と飛鳥井家が地理的に遠い距離にありながら、極めて深い関係を有していること、それが蹴鞠家維持を狙いとした経済的な背景を有する文化交流であること

を解き明かされた。久保木秀夫氏（第三回E）は、万治四年禁裏焼失本の実態の追究という長らく取り組んで来られた課題に即し、幽齋本を親本、禁裏本を祖本とする書承関係を有する本文の事例から、〈中央〉と〈地方〉の双方向に向かう伝播の実態を明示された。

一方、海野圭介氏（第三回C）は、『岷江入楚』を取り上げ、その性格や通勝講釈との関係、成立状況等を論じられた上で、書物の形式に関する新たな推論を示された。すなわち「諸抄集成」という一書で諸説の把握が可能な形式は、書物の移動の際に紛失を伴いやすいことに拠るとする、文法の〈中央〉から〈地方〉への移動を踏まえた創見である。

妹尾好信氏（第二回E）は、〈中央〉と〈地方〉を繋いで文学指南を行い続けた猪苗代正益の活動に焦点を当て、『源氏栄鑑抄』という文献の希少性及びその仙台藩内に止まる流布のありかたから、固有に発達する〈地方〉の活動を解析された。

さらにその交流において、〈地方〉から〈中央〉へという流れも指摘された。小山順子氏（第四回E）は、日本の八景詩に和歌の伝統を有さぬ地名も対象化される事例につき、「歌枕」が〈中央〉から見た〈地方〉の名所であるのに対し、〈地方〉からその地の名所を〈中央〉へ発信する仕組みとして「八景詩」を捉え返しうる可能性を説かれた。また、齋藤真麻理氏（第二回D）は、中世の〈地方〉における談義所の活発な活動に注目され、天台宗・日蓮宗のテキスト記事を通し、〈中央・地方〉の「盛衰」という視座から、衰えた〈中央〉の代替を〈地方〉の談義所が果たす役割を説かれた。

右の通り、日本の古典文学の歴史とその実態を辿ると、特に中世以降は、社会・経済構造の変化とともに、〈地方〉は〈中央〉との間に多様な関わり方を見せ、伝播・享受はもとより補完の機能をも果たすという、きわめて興味深い関係にあったことが知られてくる。

なお、近世以降、京と大坂・江戸の三都の問題をはじめ、〈中央〉と〈地方〉は、さらに種々の課題が指摘され、論じられ続けているが、本基幹研究では、中世までを一応の範囲と定め、考察を重ねている。

c 今後の活動

第五回（二〇一五・五・二二）

E 浅田 徹 「能因「東国風俗五首」を読む―地方へのまなざし―」

C 中野 貴文 「蓮田善明が鴨長明に見たもの」

A 三村 晃功 『夫木和歌抄』における出典注記の謎―「歌林良材」をめ

ぐって―」

宇和島シンポジウムとワークショップ（二〇一五・一〇・一七―一八）

ワークショップ「つどい・まなび・あそび―宇和島文化探訪」

シンポジウム「宇和島再発見―人・文化・学問」

最後の宇和島における企画は、Bグループ（四国地区担当）によって準備されてきたものであり、ワークショップでは小林健二氏・岩城賢太郎氏

・神楽岡幼子氏、シンポジウムでは福田安典氏の発表が組まれている。その福田氏の発表は、右に示した通り、研究会第一回の成果を踏まえ、宇和島における旺盛な文化活動と書物の豊富さの分析、およびその紹介がなされる計画である。

なお、本基幹研究の開始当初より計画されたこの企画は、右に述べた通りBグループの諸氏はもとより、Dグループに属する小助川元太氏に、共催の愛媛大学・宇和島伊達文化保存会との調整、後援を頂く地元の公私諸機関との連絡等に多大な助力を頂いた。またCグループの海野圭介氏には調査収集事業との関わりから、種々の援助をお願いした。ここに記して謝意を表す。

※

さて、本シンポジウムは、「文芸・宗教における九州―〈中央〉と〈地方〉の関わりから」と題して、テーマの〈中央〉と〈地方〉の問題を九州地域を対象に考えようとしたものである。「九州」を取り上げたのは、「九州担当」のCグループの成果を示すためではなく、異なるグループから「九州」を総合的に論ずるためである。具体的には、関東地区担当（A）から石澤一志氏、寺院の学芸担当（D）から高橋秀城氏、九州地区担当（C）から鈴木元氏に発表をお願いした。

以下の掲載論に明らかな通り、石澤氏は、九州探題を務めた「今川了俊」の研究状況とその資料、高橋氏は、鹿児島県南さつま市の「坊津一乗院」

が蔵する典籍群と本院の存在意義、鈴木氏は、熊本菊池市で興行された「菊池万句」の解析とそれに基づく諸問題を取り上げられた。詳細な調査に基づく三氏の分析及び考察と、その咀嚼の上になされた〈中央〉と〈地方〉の関係の捉え直しはそれぞれに新見に富み、手垢の着いた課題とされやすいこのテーマは、なお種々の角度からの追究が有効であり、日本文学及び日本文化を総合的に捉え返すために有益であることを示して頂いた。

後半の討論では、限られた時間の中、興味深い質疑応答がなされ、観点を異にする立場からの貴重な知見が提出された。担当された三氏とともに質疑応答に参加して下さい下さった方々に篤く御礼申し上げます。